

組織内での知識の円滑な共有・継承のための文書管理手法に関する研究

新原, 俊樹

<https://doi.org/10.15017/4060247>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (ライブラリーサイエンス), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 新原 俊樹

論 文 名 : 組織内での知識の円滑な共有・継承のための文書管理手法に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

社会の仕組みが高度化・専門化する中、企業や行政機関等の組織はこれまで蓄積してきた知識(知識を著した文書や資料)を構成員の間で円滑に共有・継承して組織活動の生産性を高めながら新たな価値を生み出し、継続して発展することが求められる。これらの文書の記録媒体が紙から電子ファイルに変化した現在、文書を共有フォルダの中で半永久的に保存することが可能になった反面、飛躍的に増加した文書によって組織が現在必要とする文書の共有・継承が妨げられる問題が生じている。この問題の解決に向けたアプローチとして、文書の検索能力の高度化を図る研究は多いが、共有フォルダに着目して文書のライフサイクルの問題を取り上げた研究は行われていない。こうした中で、本論文は、実際に組織が文書を保管している共有フォルダの調査を通じて文書の共有・継承の妨げとなる原因の抽出と具体的な解決手法を明らかにするとともに、特に法令等の規定に基づき文書の公開を前提とした文書管理が求められる行政機関における文書の円滑な共有・継承に適した文書管理手法を示した。

第1章では、共有フォルダの利用者に対する聞き取り調査結果の分析を通じて、共有フォルダが文書の共有・継承の場としての機能を果たせなくなる過程を詳らかにし、その原因を特定した。その上で、各原因の解消を目的とした3つの運用手法を提案し、個々の運用手法を実際に組織が使用する共有フォルダに導入して、これらの手法が持続的に適用可能であることを示した。

第2章では、第1章で提案した「共有フォルダの俯瞰図」を改善し、共有フォルダの構造の時間変化を可視化することにより、利用頻度が低下した半現用ファイルの廃棄や永久保存のための移管の判断に資する機能を充実させた。この機能を実際に組織が利用する共有フォルダに適用し、共有フォルダ内に残された古いファイルの利用履歴を明らかにし、その要否の判断に資することを確認した。

第3章と第4章では、国の行政機関の地方支分部局の共有フォルダを対象として、組織の内外からみて文書の有無及び所在の理解の共有を促すことができる文書管理の手法の提案と評価を行った。第3章では、同じ業務を所掌する他の課室との整合を考慮しながら行政文書ファイル管理簿に登録・公開すべき文書を効率的に選別するため、コサイン類似度を用いた文書の比較手法を提案した。この手法を用いて2つの行政機関の全63課室が公開する文書同士を比較し、異なる地域であっても同種の業務を所掌する課室の間で類似する文書を多く保管している特徴があることを明らかにした。次に、この特徴を利用し、ある課室が管理簿に登録すべき文書について、同種の業務を所掌する他の課室の文書との間で算出したコサイン類似度に基づき選別する手法を提案した。この手法により、実際の一課室が管理簿に登録している文書を(1)他のどの課室も同様に登録している文書、(2)他のどの課室も登録していない文書の2種類に分けて提示するとともに、(3)他の多くの課室が登録していながら当該課室は登録していない文書を示した。

第4章では、組織の内外からみて文書の有無と所在の理解を促す文書の分類構成にする手法として、法令や行政規則を分類の手段とする改善モデルを提案した。このモデルの有効性の評価に当たり、実際に行政機関が管理簿上で公開している文書を複数の課室に跨って横断的に振り分けたほか、ある特定の課室において4年間にわたり業務として受信されてきた電子メールを網羅的に振り分けたところ、文書の多くがモデルに適用できることを確認した。これにより、法令や行政規則が組織の内外から文書を効率的に特定するのに有効なメタデータの一つとなり得ることを示した。